

老年期のサードプレイスの持続可能性

——ソーシャル・キャピタルから考える——

榊 野 光 路

I. 背景と目的

わが国では、人生 100 年時代を見据えた国家プロジェクトが各分野で立ち上がっている中で、同時に人口減少社会として国民の健康寿命の延伸と地域での体制づくりが重要となる。そのためには、老年期に介護状態にならないための予防の仕組みづくりや、住み慣れた地域で暮らし続けるための社会参加を促進する地域構築が求められてくる。

総務省統計局¹⁾によれば、日本人の総人口は、令和 4 (2022) 年 5 月現在、1 億 2,232 万人で前年比 67 万人の人口減少である。65 歳以上の高齢者人口は 3,624 万人で総人口に占める 65 歳以上の人口割合（高齢化率）は 29.1%であり毎年過去最高を更新している。

高齢者の定義は、WHO や国連、他の先進国においても定義付けはされていないが、65 歳以上となっている国が多い。この定義に医学的な根拠が貧しい中、我が国では、高齢者数の増加が「依存」や「社会的コスト」などの社会的負担の増加などという、根強い固定観念から生まれる高齢者差別などのエイジズムの概念が依然と存在する。このような社会構造に対して、エイジズムの概念を提唱したロバート・N・バトラー（米老年学者）は、政治的課題として扱うべき枠組みだとしてプロダクティブ・エイジング²⁾ (Productive Aging. 高齢者の生産性を広く捉える) という概念で問題提起している (Butler & Gleason 1985=1998)。また、高齢者単身世帯の増加による高齢者の社会的孤立も「生き甲斐の低下」、「孤立死の増加」を生み出しており (内閣府 2010: 57-61)、それぞれの対応が求められている。それら

は、地域行政や地域福祉の専門職だけでは対応は困難であり、住民主体による居場所や役割づくりが不可欠となっている（厚生労働省 2017：4）（河合ら 2013）。

近年では、働き方改革の一環として、大企業では 70 歳までの定年延長も囁かれ始めている。しかし、人生 100 年時代とは、企業内コミュニティ時間の延伸と同時に、いつかは訪れる地域でのコミュニティ時間の延伸にもつながり、前述のエイジズムの払拭と共に住み慣れた地域での役割や居場所・社会関係性構築の持続可能性を大いに求められる。

以上のことを踏まえ、本研究では、東京都豊島区で行った「住民との協働による介護予防まちづくりの効果検証のための地域コントロールトライアル³⁾」の研究事業によりグループ化支援された、高齢者住民グループの地域拠点活動（老年期のサードプレイス）から持続可能性につながる要因をソーシャル・キャピタルの概念や文献から考察することを目的とする。

II. 方法

1 先行研究・文献調査

先行研究と文献調査により高齢社会における地域づくりに必要なソーシャル・キャピタルと、老年期のサードプレイスについて、それぞれの概念を整理する。

ソーシャル・キャピタルは「社会関係資本」と訳され、1972 年にフランスの社会学者ピエール・ブルデュー（仏社会学者）が社会学的な文脈で初めて用いた。90 年代に入り、インフラなどの社会資本のような具体的なものとは異なり、人々やネットワークの関係性の集積が社会にとって有益な効果をもたらす社会資源とアメリカの政治学者ロバート・パットナムが定義づけた（Putnam 1993：167）。さらに、パットナムはこの定義において、ソーシャル・キャピタルを構成する重要な下位要素は、①市民社会の水平的ネットワーク、②一般的信頼感、③一般化された互酬性の規範の 3 つがキーワードだと説いている。

最近の研究では、健康寿命の延伸や閉じこもり予防、認知機能低下の予防など個人や集団にとってソーシャル・キャピタルが有益な可能性を示されている（相田ら 2014）。地域に醸成するソーシャル・キャピタルを調査分析し、住民主体による地域拠点活動の持続可能性の考察を行った。

次に、サードプレイスは、レイ・オルデンバーグ（Rey Oldenburg 1989）が著書「The Great Good Place」中で説いた概念で、生活の場となる自宅（第1の居場所）でも職場や学校（第2の居場所）でもないインフォーマルな都市生活の中核的環境を第3の居場所（サードプレイス）と定義したものである。アメリカの都市社会からコミュニティが消滅してきているという課題意識から、世界的な兆候を危惧したオルデンバーグが、その必要性を主張したもののだが、日本における特有性とリタイア後の高齢世代におけるサードプレイスの概念を整理して考察した。

2 アンケート調査

本研究で使用する「住民との協働による介護予防まちづくりの効果検証のための地域コントロールトライアル」の研究事業で行った「2018（平成30）年度豊島区シニア心と体の健康調査⁴⁾」のデータは、東京都健康長寿医療センター研究所の許可の元、調査ローデータから筆者独自による集計と分析を行ったものである。なお、データ提供条件として、本論巻末の付記へ研究所指定の調査名を表記するものとする。

アンケート調査では、豊島区で活動する高齢者団体（いきいきクラブ IN 豊島⁵⁾）の老年期のサードプレイス（高齢者サロン⁶⁾）の利用者と地域の高齢者へ以下の各指標を用いて複数回答と評価スケール回答とし郵送調査を行った。

1. 主観的健康感
2. 社会参加の有無と場所
3. 老年期のサードプレイスへの参加と認知度
4. 地域とのソーシャル・キャピタル（社会的凝集性、団結力、連帯）

アンケート調査結果を比較して、地域の高齢者の社会参加への意識や連帯感や絆といったソーシャル・キャピタルの概念と老年期のサードプレイスで

のソーシャル・キャピタルの傾向を分析し考察した。

3 調査の概要

3-1 地域の高齢者へのアンケート調査

2018年11月自記式質問紙方式で行った。対象者の属性は、豊島区の巣鴨3丁目～5丁目、西巣鴨1丁目～4丁目、北大塚1丁目～2丁目の豊島区菊かおる園高齢者総合相談センター管轄地域に在住の65歳から84歳までの高齢者。有効回答者数：1861件

3-2 いきいきクラブIN 豊島の高齢者サロンの利用者へのアンケート調査

2020年8月の高齢者サロン開催日に自記式質問紙方式で行った。対象者の属性は、介護予防の高齢者サロンの地域拠点活動を定期利用している65歳以上の地域高齢者。有効回答者数：50件

Ⅲ. 調査

1 ソーシャル・キャピタルが地域に与える影響

1-1 高齢社会の地域に必要なソーシャル・キャピタルの要素

高取（2017）は、地域高齢者の健康増進、要介護状態の予防の地域づくりには行政主導による中央集中型の健康教室や介護予防教室ではなく、住民同士のネットワーク、互酬性の規範といったソーシャル・キャピタル要素の醸成がある住民主導の居場所が重要であると述べている。さらに、住民主体の介護予防促進の地域づくりにはソーシャル・キャピタルの基本的要素「つながり」「信頼」「互酬性の規範」「社会活動」を全て含むものとして、住民主体による組織に求める要素は、ブリッジング・ソーシャル・キャピタル⁷⁾だとしている（高取2017）。これは、高齢者の健康寿命延伸に対して同じ目標を持った高齢者住民の主体化が地域住民間のソーシャル・キャピタルを醸成させることを意味しており、醸成されるソーシャル・キャピタルが持続可能性のある地域づくりの要素になると推察する。

また、高取は「互酬性の規範」の観点から、これらの活動の継続・発展は

直接的に関与しない地域高齢者の健康行動にも良好な影響を与え、「地域への信頼」にも貢献する可能性があるとしている（高取 2017）。これは、住民主体という特性から、実際に関わる居場所運営高齢者と参加高齢者が相互的に元気・健康のお手本となり、健康度や主観的健康感に影響するとしている。

1－2 心の安寧をもたらす健康感を高めるソーシャル・キャピタルの要素

山縣（2009）は、孤立感や孤独感が強いと健康寿命が長くない。そして、健康長寿日本一の山梨の背景に「無尽」を象徴とする住民同士の密接な信頼関係を指摘し、開放感よりも閉鎖的な環境の方が心の安寧があり健康長寿にもつながると説いている。これは、社会的凝集性や団結力の構成要素「ソーシャル・コヒージョン（社会的連帯や絆）」が関係していると言う。このソーシャル・コヒージョンとは、ソーシャル・キャピタルと同様の概念で“社会にある多数のグループの連結や連帯（connectedness and solidarity）の拡がり”をいい、コヒーズンな社会には“相互の道徳的な支援（mutual moral support）が豊富にある”という特徴がある（Kawachi & Berkman, 2000）。そして、ソーシャル・コヒージョンやソーシャル・キャピタルが豊富な社会ほど、健康度が高く、健康格差が少ないことが示唆されている（WHO, 2010a）。以上のことから、孤立感の予防、心の安寧を生む環境、ソーシャル・コヒージョン、道徳的な支援など、高齢者の居場所に必要な持続可能性の要素と考える。これらの要素を高齢者住民主体の高齢者サロンで醸成される特性をグラフ化して老年期のサードプレイスに必要な要素を検証する。

2 老年期のサードプレイスの要素

2－1 日本型のサードプレイス

日本ではオルデンバーグ（2013）の主張や定義のすべてが当てはまるものではないが、日本型のサードプレイスの展開として、会話などを楽しむ交流を目的とする交流型や、交流を気にせず個人の空間を楽しむマイプレイス型があるとされる（小林ら, 2013, 2014, 2015）。しかし、オルデンバーグは、その著書の中でサードプレイスの代表例として、フランスやイタリアの“カフェ”、イギリスの“パブ”とし、以下の8つの特徴（表1）を上げているが、日本では、カフェやパブでの過ごし方は、マイプレイス型の使い方のニーズ

が多いように、国の文化や国民性によっても変わってくることが分かる。

オルデンバーグの挙げた特徴を言い換えると「社会的地位や所属を気にすることなく誰とでも馴染みになる人間関係が気軽に築ける目立たない居場所」となるが、日本の交流型のことを言っていることが分かる。このように、文化や国民性によってもサードプレイスを代名詞とする居場所は様々だが、さらに、年代や性別、職業、役割などの立場によっても変わってくると考える。

表1 サードプレイスの8つの特徴

社会的中立性	出入りが自由で、全員がくつろいで居心地が良いと感じる場所。
社会的平等性	社会的期身分差とは無縁で誰でも出入りができ、他者の受け入れに制約がない場所
会話が中心	人との交流を楽しむ場所
社会的利便性	時間帯に限定なく、近場にあつてすぐに行ける場所
常連の存在	しかるべき人＝なじみがいて活気づけられる場所
目立たない存在	おとなしさがにじみ出ている場所
遊び心がある	日常逃避が感じられる場所
もうひとつの我が家	その場を創っている集団の一員という自覚が生まれるような“家らしさ”がある場所

2-2 老年期のサードプレイスに必要な概念

サードプレイスは、自宅でもない職場や学校でもない第3の居場所と前項で定義した。しかし、リタイア後の高齢者は、職場にあたる第2の居場所を持たない高齢者が多いはずだ。村田（2004）は、壮年期の長い時間を過ごした職場という第2の居場所で培った有形・無形の価値に置き換わるのは「新たな第3の居場所」であると述べている。鈴木（2017）は、老年期の特にリタイア後は、仕事を通じた交流や人との関係性の喪失の時期と説いている。さらに、三浦（2010）によれば、老年期に地域で新たな他者と人間関係を見出せない高齢者は「無縁社会」に置かれるという。以上の論述のように、リタイア後は、職場や仕事で培った居場所と仲間を失うこととなる。住み慣れた地域に居場所を持っても、その後の関係性構築が自助努力では、社会的孤立を増やす危険性がある。大都市高齢者のリタイア後の地域社

会には、新たな他者との新たな関係性構築につながるサードプレイスの存在が重要である。

Ⅳ. 結果・分析

1 地域高齢者のソーシャル・キャピタルの比較（図1）

本研究では、アンケート調査の結果を地域高齢者のサロン参加の種別に整理して地域におけるソーシャル・キャピタルの醸成を比較分析を行った。但し、2つの調査で有効回答者数が異なるため、それぞれの有効回答数の総数から回答数をパーセンテージ化したもので比較分析し考察している。

居場所を全く利用していない高齢者、行政主導による中央集中型の施設等利用の高齢者、いきいきクラブなどの住民主体の高齢者サロン利用経験のある高齢者、それぞれで醸成されているソーシャル・キャピタルの要素を比較分類した。特に、行政主導の居場所でも、利用経験の有無で高齢者の地域へのソーシャル・キャピタルの醸成が異なり、いきいきクラブの高齢者サロンの利用者へのアンケート調査では、住民主体の居場所でのソーシャル・キャピタルの醸成が高く見られる。尚、有効回答数が異なるが集計を対比すると、グラフのように類似性が見られることから比較分析の対象としている。

SC要素	サロン参加 経験なし	サロン参加あり	いきいきクラブ サロン利用者
信頼できる	56%	68.5%	—
近所の助けをする	36%	40.0%	—
地域グループへの所属	66%	95.7%	97.9%
結束が強い	34%	45.6%	—
人任せにしてもよい	42%	21.1%	26.0%
行政任せでよい	38%	38.6%	18.0%
住民運動に関わらない	22%	19.1%	12.0%
町内会の仕事を引き受ける	22%	30.0%	36.0%
地域をよくする協力がしたい	59%	68.1%	78.0%
高齢者の世話をする	26%	41.8%	48.0%
地域の皆と活動する	33%	47.1%	58.0%
地域に誇りを感じる	63%	68.5%	68.0%

図1 地域高齢者のソーシャル・キャピタルの比較（筆者作成）

2 ソーシャル・キャピタルのカテゴリー分析（表 2）

本研究では、各ソーシャル・キャピタルの要素別の醸成を分析するため、要素のカテゴリー分けをした。なんらかのサロン参加している高齢者には、先行研究で前述したように、住民主体の介護予防促進の地域づくりにはソーシャル・キャピタルの基本的要素「つながり」「信頼」「互酬性の規範」「社会活動」の全ての要素が未参加の高齢者よりも高いものが地域に存在していた。また、地域への信頼度の要素となる「社会的凝集性」と「社会的ネットワーク」と共に、安心感やお互い様度の「社会的連帯や絆」の存在が、高齢者の居場所や住民主体のいきいきクラブの高齢者サロン参加者には高い傾向が見られた。

表2 ソーシャル・キャピタルのカテゴリー分析（筆者作成）

		研究対象包括管轄地区の地域高齢者		
		(n=1816)	(n=90)	(n=50)
SC	SC 要素	サロン参加 経験なし	サロン参加 あり	いきいきクラブ サロン利用者
社会的凝集性	信頼できる	56.1%	68.5%	—
	近所の手助けをする	35.9%	40.0%	—
社会的 network	地域グループへの所属	66.1%	95.7%	97.9%
	結束が強い	33.9%	45.6%	—
社会的連帯や絆 ※ソーシャル・コヒージョン	人任せにしてもよい	41.6%	21.1%	26.0%
	行政任せでよい	38.0%	38.6%	18.0%
	住民運動に関わらない	22.3%	19.1%	12.0%
	町内会の仕事を引き受ける	21.8%	30.0%	36.0%
	地域をよくする協力がしたい	59.0%	68.1%	78.0%
	高齢者の世話をする	26.2%	41.8%	48.0%
	地域の皆と活動する	32.8%	47.1%	58.0%
	地域に誇りを感じる	62.8%	68.5%	68.0%

3 高齢者サロン参加の有無によるソーシャル・キャピタルへの影響（図 2）

高齢者サロン参加の有無は、信頼感と所属感（ネットワーク）へ大きな影響を与えていることを推察する。信頼感につながるお互い様と言った社会的凝集性の“近所の手助けをする”という項目に差は見られなかったが、回答選択肢の“どちらとも言えない”が双方50%前後を示し、“喜んで手助けする”とした強調表現を付与した選択肢が明確な回答を鈍らせていると考える。

SC要素	サロン参加経験なし	サロン参加あり
信頼できる	56%	68.5%
近所の手助けをする	36%	40.0%
地域グループへの所属	66%	95.7%

図2 地域のソーシャル・キャピタルへの影響（筆者作成）

4 高齢者サロン参加の有無によるソーシャル・コヒージョンの醸成（図3）

この結果から、地域でサロン参加している高齢者に大きく醸成していると推察される。特に、いきいきクラブの高齢者サロンの利用者による“地域をよくする協力をする”に回答が高く、連帯感や絆が強いことを示しており、地域や高齢者サロンに対する安心感や安寧度を高く感じていることが推察される。その反面、“町内会の仕事を引き受ける”への回答は高くなく、町内会に由来より閉鎖されたコミュニティとされがち、ボンディング・ソーシャル・キャピタル⁸⁾への印象が地域の意識に存在する回答だと推察される。

SC要素	サロン参加 経験なし	サロン参加あり	いきいきクラブ サロン利用者
結束が強い	34%	45.6%	—
人任せにしてもよい	42%	21.1%	26.0%
行政任せでよい	38%	38.6%	18.0%
住民運動に関わらない	22%	19.1%	12.0%
町内会の仕事を引き受ける	22%	30.0%	36.0%
地域をよくする協力がしたい	59%	68.1%	78.0%
高齢者の世話をする	26%	41.8%	48.0%
地域の皆と活動する	33%	47.1%	58.0%
地域に誇りを感じる	63%	68.5%	68.0%

図3 地域のソーシャル・コヒージョンの醸成（筆者作成）

5 地域 の 場所・組織・関係性の評価（図4、5、6、7）

いきいきクラブの高齢者サロン利用者が、「つながり」「信頼」「おしゃべりの居場所」として、場所や組織と関係性を評価したものである。どの評価も住民主体で運営するものとして、地域の公共施設や行政主導のものと対比すると、親族・友人などの関係性を除けば、次点といった高評価である。特

に、困りごとに頼れる団体としての高評価と、おしゃべりする居場所として飲食店と同等な評価は利用者との間に高いソーシャル・キャピタルの存在を推察する。なお、公共施設などへの評価を超えられない理由は、いつ行っても開設しているといった頻度や便利度に関係していると考える。

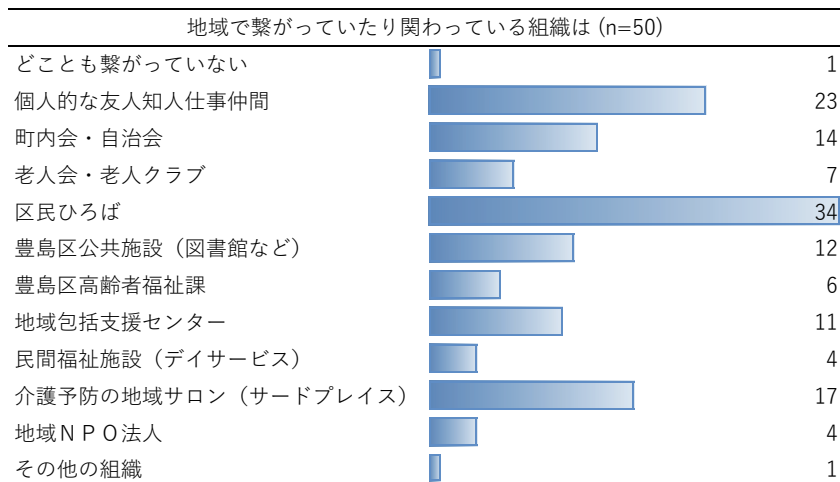


図4 地域で繋がりが関わっている組織（筆者作成）

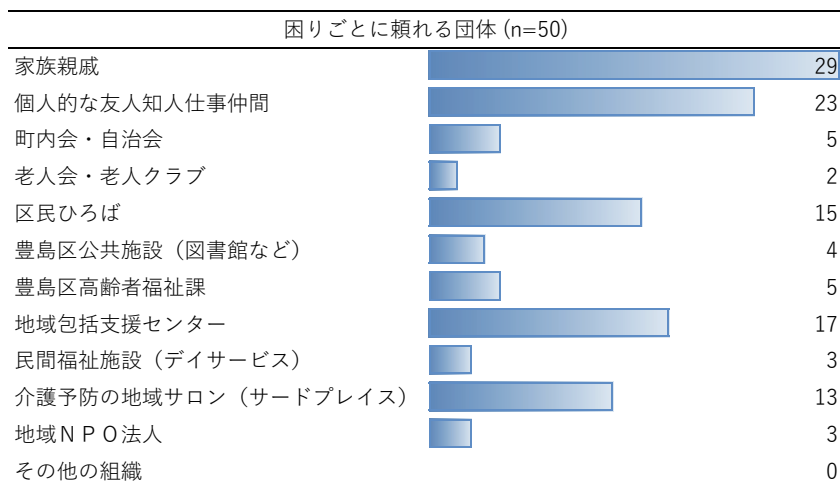


図5 困りごとに頼れる団体（筆者作成）

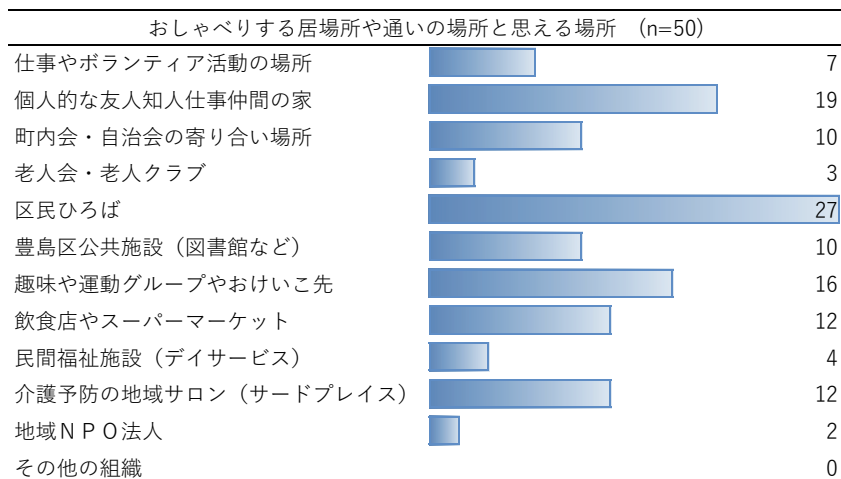


図6 おしゃべりする居場所や通いの場所と思える場所（筆者作成）

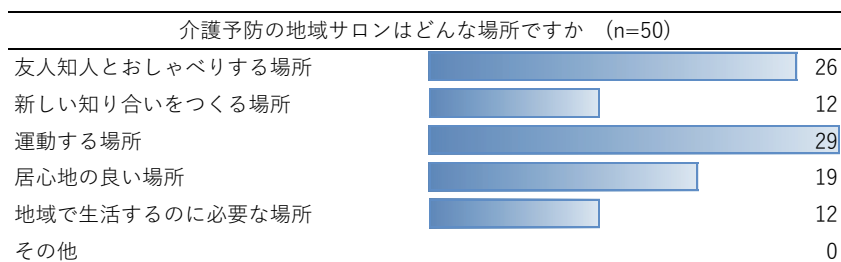


図7 介護予防の高齢者サロンはどんな場所（筆者作成）

V. 考察

アンケート調査の結果から、豊島区の高齢者の居場所には、信頼感や凝集性といったソーシャル・キャピタルが醸成されていることが推察された。さらに、ソーシャル・コヒージョンなどの社会的連帯の要素が確認され、いきいきクラブの高齢者サロンでは、特に強く存在していた調査結果が印象的であった。

また、高齢者の居場所や高齢者サロンには、高齢者特有のサードプレイス

の要素や役割があると言われるが、壮年期のようなセカンドプレイスを持たない高齢者には、どのような居場所がサードプレイスと位置付けられるのだろうか。

本研究では、高齢者の居場所や高齢者サロンに存在するサードプレイス感を分析し「老年期のサードプレイス」として定義付けを行った。

1 老年期のサードプレイスの定義

オルデンバーグが定義したサードプレイスは、日本文化特有な日本型サードプレイスの定義も生まれており、老年期のサードプレイスを考察する上でも重要な要素となる。小林ら（2013,2014,2015）が定義した、会話などを楽しむ交流を目的とする「交流型」と交流を気にせずに個人の空間を楽しむ「マイプレイス型」から援用する。マイプレイス型は、日本人らしさを感じるが、このタイプは、役割や世代によって生活スタイルが激変する日本の背景に関係していると考えられる。オルデンバーグは、自著の文献の中で「社会的地位や所属を気にすることなく、誰とでも馴染みになる人間関係が気軽に築ける、目立たないとびきり居心地が良い場所」がサードプレイスと定義しており、日本の交流型・マイプレイス型双方の定義を内包していることを援用する。また、村田（2004）が定義した、壮年期に職場のコミュニティに比重が大きかった高齢者は、リタイア後に、職場などの第2の場所で培った有形・無形の価値に置き換わる居場所が「新たな第3の居場所」となる考え方を援用する。

以上のことから「老年期のサードプレイス」には、オルデンバーグの8つの特徴（社会的中立性、社会的公平性、会話が中心、社会的利便性、常連の存在、目立たない存在、遊び心がある、もうひとつの我が家）とした一般的なサードプレイスの定義に加え、壮年期における第2の居場所で得ていた、有形無形の価値に値する「情報」「知識」「新たな他者」といった「新しき資源との出会い」が叶う交流型の居場所であり、壮年期の社会的地位や所属に触れず、居場所でも社会的役割が対等の約束のある居場所が、老年期のサードプレイスと定義できる。

2 住民主体による老年期のサードプレイスの持続可能性

高取（2017）の住民主体の居場所の定義を援用し、住民同士のネットワーク（所属感）、互酬性の規範（信頼感）といったソーシャル・キャピタル要素の醸成を検証する。また、ストレス低減や健康感増進につながる「孤立感の予防、心の安寧を生む環境、ソーシャル・コヒージョン（社会的連帯や絆）、道徳的な支援」と言った定義を援用し、アンケート調査の分析から持続可能性の考察をする。

本研究の調査地域には、ソーシャル・キャピタルの基本的要素である「つながり」「信頼」「互酬性の規範」「社会活動」が、高齢者サロンに参加したことのない高齢者への醸成よりも、参加したことのある高齢者への醸成がすべての要素において上回っている。これは、高齢者のサロンが地域をブリッジング・ソーシャル・キャピタルとして規範や結束を強くすることに繋がっていると推察する。更に、地域への信頼度の要素となる「社会的凝集性」と「社会的ネットワーク」と共に、安心感やお互い様度の「社会的連帯」の醸成もあり、住民主体のいきいきクラブの高齢者サロン参加者には、特に高い醸成が見られた（表2）。

地域高齢者による地域へのソーシャル・コヒージョンの醸成（図3）では、地域をよくする協力がしたい、地域の皆と活動するなど、ソーシャル・コヒージョンのそれぞれの要素が、特に、いきいきクラブのサロン利用者に高く醸成されている。以上の検証より、ソーシャル・コヒージョンやソーシャル・キャピタルが豊富とまでの検証はできないが、醸成されていることが推察でき、孤立感の予防、心の安寧を生む環境、道徳的な支援など、高齢者の居場所の持続可能性の要素が、いきいきクラブの高齢者サロンに存在しているといえるだろう。

老年期のサードプレイスの持続可能性には、利用高齢者のソーシャル・キャピタルとソーシャル・コヒージョンの醸成が必要であると同時に、運営する高齢者にとっての「新たな第3の居場所」となることが持続可能性の条件や要素であると考察する。

最後に、本研究では、高齢者が地域で活躍する持続可能性を、地域高齢者が老年期のサードプレイスに求める要素と、その場で醸成される幸福感や安

寧などをソーシャル・キャピタルの概念から持続可能性を考察した。しかし、前述したように、社会には、まだ、高齢者を「社会的コスト」「介護」「依存」として扱うエイジズムが存在している。そのため、担い手となりうる高齢者が、エイジズムにより地域で活躍する意欲を侵されると人生 100 年時代の地域人材も限定されてしまい、持続可能性にも影響があると推察する。柴田 (2013) が、バトラー (1976) のプロダクティブ・エイジングやプロダクティビティの概念を「高齢者の社会貢献」と訳し、地域貢献活動することが高齢者の「生きがい」につながる重要な要素であると提唱しているように、今後の研究課題として、地域でのエイジズムの払拭と高齢者の社会貢献活動の持続可能性ある仕組みづくりを、公共や地域でどのように整備・構築すれば良いか考える必要がある。

註

1) 総務省統計局ホームページ 人口推計 (令和 4 年 (2022 年) 5 月確定値)
<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/new.html> (2022/05/01)

2) プロダクティブ・エイジング

アメリカの老年学者である「ロバート・バトラー (Butler, R. N.)」が 1976 (昭和 51) 年に高齢者に自立を求めるとともに、さまざまな生産的なものに寄与するために社会・地域資源と広域にとらえ、積極的な社会参加が必要であるという考え方を提唱した概念。バトラーは、家事やボランティア活動やセルフケアなどの無償労働も含まれる概念とした。

3) 東京都健康長寿医療センター研究所 2014-2017:AMED

4) 豊島区シニア心と体の健康調査, 東京都健康長寿医療センター研究所 2014-2017:AMED の研究事業

5) いきいきクラブ IN 豊島

豊島区在住の高齢者による介護予防活動団体、会員数 16 名 (男性 6 名 女性 10 名※設立時)。東京都健康長寿医療センター研究所、豊島区、NPO 法人コミュニティランドスケープ、大正大学と共催で実施している「住民との協働による介護予防のまちづくり」の普及と発展に寄与することを目的としている。2022 年 10 月現在 8 箇所の高齢者サロンを

運営している。

6) 高齢者サロン

①ほほえみサロン

活動内容:体操、コミュニケーション、活動開始:2016年4月22日、参加人数:約200名(2017年3月時点の延べ人数)、NPOの支援により区民ひろばで活動開始した。

②楽楽吹き矢

活動内容:スポーツ吹き矢、オリジナル体操、茶話会、活動開始:2016年4月5日、参加人数:約180名(2017年3月時点の延べ人数)、CSWの支援により都営住宅の集会室で助成金を利用して活動開始した。

③栄養・口腔しあわせサロン

活動内容:口腔栄養の講話、おとな食堂、交流会、活動開始:2016年4月22日、参加人数:147名(2017年3月時点の延べ人数)、CSWの支援により都営住宅の集会室で助成金を利用して活動開始した。

④西すパートナーズ

活動内容:オリジナル体操、花街道の水やり、清掃ウォーキング、活動開始:2016年4月27日、参加人数:142名(2017年3月時点の延べ人数)、大正大学の場所と設備の支援により活動開始した。

7) ブリッジング・ソーシャル・キャピタル

ブリッジング型は、異質集団との連携にも新しい知識の採り入れにも積極的だが、結束力や共通の規範は薄れ、集団行動につながりにくいとしている。

8) ボンディング・ソーシャル・キャピタル

同種集団として結束力があるが閉鎖的で新しい知識の導入に遅れるとされるソーシャル・キャピタルの種類。主に町内会、自治会、商店会などが例えられる。

付記

本研究の調査は、AMED 長寿科学研究開発事業「住民との協働による介護予防のまちづくりの効果検証のための地域コントロールトライアル」、NEDO-PRISM 加速費「人工知能技術適用によるスマート社会の実現」研究テーマ「IoT・AI 支援型健康・介護サービスシステムの開発と社会実装研究」において筆者が協力研究員を勤める東京都健康長寿医療センター研究所が実施した。研究所の関係者ならびに豊島区でアンケートおよびインタビュー調査に協力いただいた皆様に謝意を表します。

文献

- 河合 恒、2018、『コーディネーターのかかわりによって私的社会統制を強めない住民協働の介護予防の推進効果』、老年学会 科学 第 39 巻 4 号 (2018.1) 別刷 443-451
- 川島典子、2020、『ソーシャル・キャピタルに着目した包括的支援』、晃洋書房、64-72
- イチロー カワチ、2008、『ソーシャル・キャピタルと健康』、日本評論社、11-50
- レイ・オルデンバーグ、2013、『サードプレイス』、みすず書房、64-97
- 稲葉陽二、2016、『ソーシャル・キャピタルの世界』、ミネルヴァ書房、73-105
- 稲葉陽二、2008、『ソーシャル・キャピタルの潜在力』、日本評論社、81-104
- 稲葉陽二、2011、『ソーシャル・キャピタル入門』、中公新書、23-68
- Robert D. Putnam、2006、『孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生』、柏書房、14-28
- 長寿科学振興財団機関誌、2019、『エイジングアンドヘルス秋号』No.91 第 28 巻第 3 号、4-9